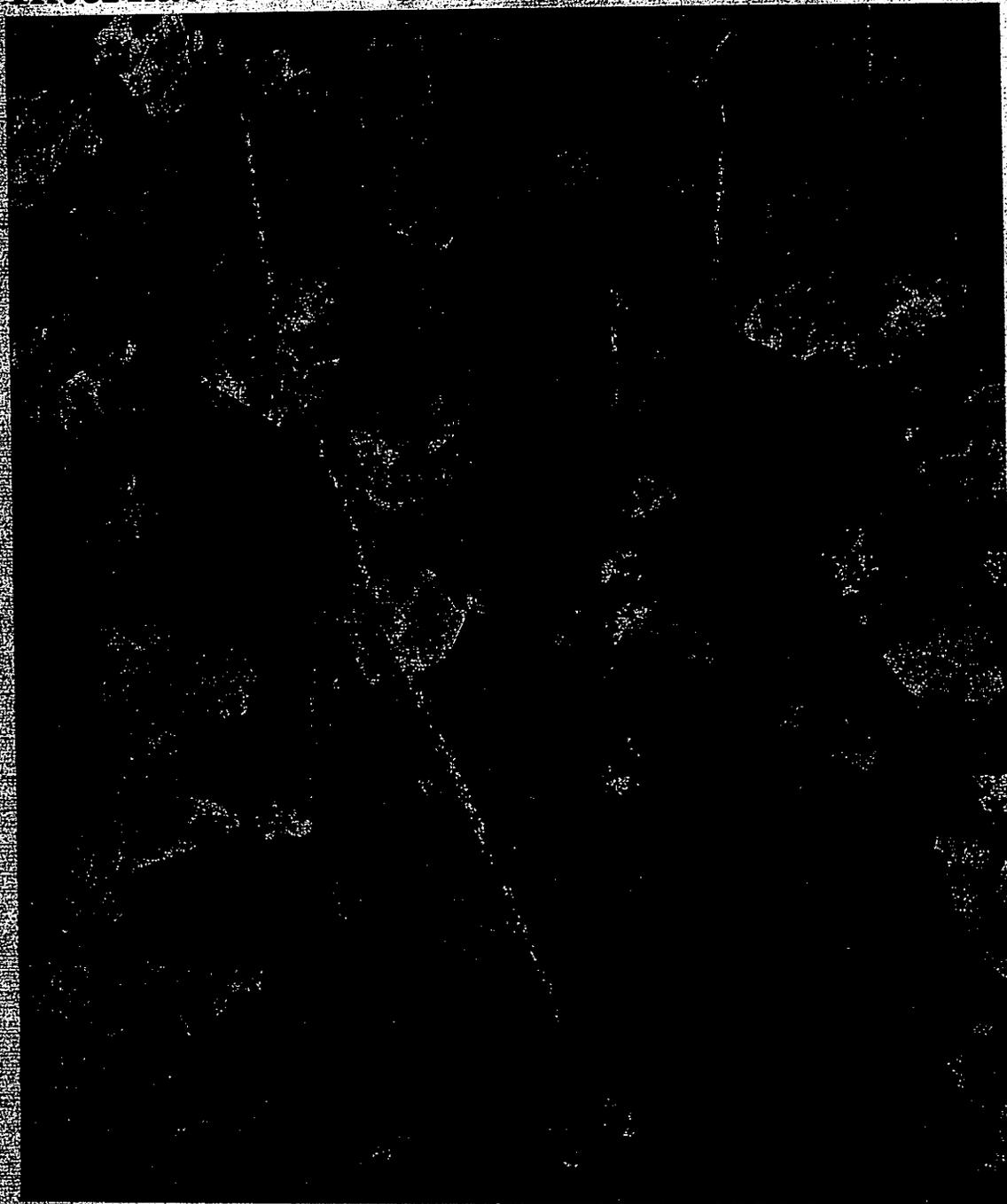


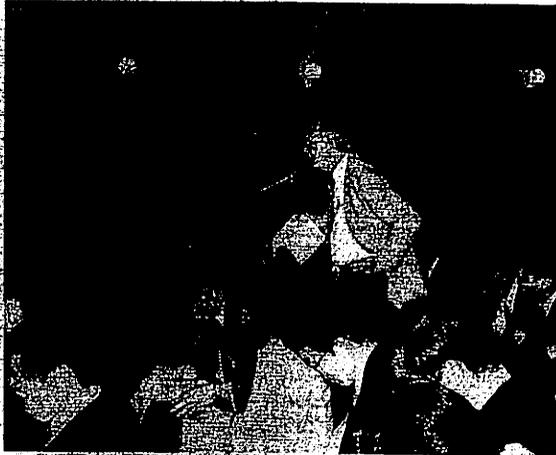
ICF

International Communications Foundation



財団法人国際コミュニケーション基金機関誌

1991-10 No.5



直径130mmで600MB、86mmで128MBのディスクが商品化されており、本会議では次世代に向けた先端技術・新材料の発表が中心となりました。

高密度化の面では、光の波長限界を越えて記録再生ができ、従来の倍の高密度化が可能な方式が目ざされました。ブルーレーザー光を従来の800nmの波長領域から400nmの短波長へ移行させたときに4倍の高密度化が可能です。その際有望視されている光ディスク型新材料の発表も盛んでした。記録の高速化の研究も関心の的で、オーバーライト技術(消去と記録を同時に行う)や高速記録制御技術が進展しました。研究の先端では8MB/sと磁気記録と同等以上の高速性が実証されました。

研究開発の面で日本が主導してきた光磁気ディスク関係の国際会議が、日本で初めて開催され成功したことは喜ばしいことでした。第2回のシンポジウムは、1992年12月に米国のアリゾナ州ツーソンで開催されることになりました。

社会科学での 情報ボーダーレス化を実感

一橋大学教授・政治学

加藤 哲郎

国際会議への参加助成をいただいて、7月10～13日、真冬のオーストラリアの首都キャンベラで開かれた、第7回オーストラリア日本研究学会に出席してきました。

たまたま私のペーパーが、1989年の東欧の動きを「テレビ時代の連鎖的革新」としてとらえ、政治変動の電波を通じての世界化の問題を扱ったのでICF助成をお願いしたのですが、あとで助成を受けた研究のリストを見ると人文・社会科学分野は少ないので、私への援助に感謝するとともに、若干の後ろめたさをもって参加しました。

しかし、会議では、情報通信のボーダーレス化を実感しました。オーストラリアの研究者は日本事情にくわしく、「新人類」「帰国子女」「過労死」といった日本語が、英語の議論のなかでとびかいます。それ以上に驚いたのは、参加者の100本の膨大なペーパーが、全部同じ書式・印刷で3冊の立派な本にまとめられ、初日に全員に配られたことです。春の段階でペーパーはフロッピーで提出するようになるといわれ、私も和製英文用ソフトで書いた原稿をフロッピーで送っていたのですが、それがこういう形になるとは、思ってもみませんでした。私の出席した国際会議では初めての経験で、ペーパー読了を前提に話ができますから、報告時間は節約され討論も深ま